

集英社版

世界文学
全集

77

ヘミングウェイ

集英社版

世界文学全集

77

ヘミングウェイ

老人と海 他

訳 Ⅱ

野崎 孝

佐伯 彰一

沼澤 洽治

集英社

THE OLD MAN AND THE SEA
THE SUN ALSO RISES
THE KILLERS
HILLS LIKE WHITE ELEPHANTS
FATHERS AND SONS
A CLEAN, WELL-LIGHTED PLACE
THE SNOWS OF KILIMANJARO
THE SHORT HAPPY LIFE OF FRANCIS MACOMBER
by Ernest Hemingway

©1952, 1926, 1927, 1927, 1933, 1933, 1936, 1936.

Japanese language anthology rights
has taken from Alfred Rice
through Charles E. Tuttle Company Inc.,
Tokyo.

© 1977 Shueisha Printed in Japan



集英社版 世界文学全集 77
老人と海 他

一九七七年十月二十日 第一刷
一九七七年十月二十五日 第二刷

訳者 佐伯彰一／野崎 孝／沼澤治治
編集 株式会社 綜合社

一〇一 東京都千代田区神田神保町三十一番五
電話 (〇三) 二三九一三八一

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

一〇一 東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇
電話 出版部 (〇三) 二三〇一六三六一

販売部 (〇三) 二三〇一六一七一

印刷所 凸版印刷株式会社

目次

日はまた昇る	佐伯彰一訳	3
老人と海	野崎 孝訳	187
殺し屋達	沼澤洽治訳	259
白い象に似た山々	沼澤洽治訳	269
清潔で明るい所	沼澤洽治訳	275
父と息子	佐伯彰一訳	279
キリマンジャロの雪	沼澤洽治訳	289
フランシス・マコウマーの 短い幸福な生涯	佐伯彰一訳	311
後記・注解		343
解説	沼澤洽治	345
年譜		357

日はまた昇る

この本を

ハドリーとジョン・ハドリー・ニキャナーに捧ぐ

「みんな失われた世代ね、あなたたちは」

——ガートルード・スタインの言葉

「世は去り世は来る 地は永久に長存なり 日は出て日は入りまたその出し処に喘ぎゆくなり 風は南に行き又転りて北にむかひ旋転に旋りて行き風復その旋転る処にかへる 河はみな海に流れ入る海は盈ること無し河はその出きたれる処に復還りゆくなり」

——伝道の書

第 I 卷

1

ロバート・コーンは、プリンストンの学生時代ミドル級のチャンピオンだった。こちらがこの程度のタイトルの恐れ入ったと思われるが、コーン自身は大意だった。やっこさんは拳闘が好きじゃなく、むしろ嫌いなので、苦勞してみっちり練習にはげんだというのも、プリンストンでユダ公扱いされた劣等感と内気さを克服しようためだった。自分を見くだした連中を叩きのめしてやれると思うと、胸のつかえがおりる氣持だった。もっともたいへん内気で、しかも人づきのいい青年だったから、ジム以外で喧嘩などをしたことはない。スパイダー・ケリーのひか一の弟子だった。スパイダー・ケリーは、どの学生にもみんな、百五ポンドだろうと、二百五ポンドだろうとフェザー級流の拳闘を教えこんだ。が、コーンには、このやり方

が合ったらしい。實際すごく素早かった。動きがあまりいいので、スパイダーは、すぐに上の相手と組ませ、コーンの鼻はすっかりつぶされてしまった。そのせいでコーンの拳闘嫌いはますますつのったが、一種妙な満足感をおぼえもしたし、彼の鼻はかえって良くなったようなものだ。プリンストン最後の年は、本を読みすぎて、眼鏡をかけだした。同じクラスの男に会っても、だれ一人コーンのことを覚えていなかった。ミドル級のチャンピオンということさえ覚えていなかった。

ぼくは、いわゆる率直単純な人種は、とくに彼らの話の辻つまが合っているときなどいっさい信用しないことにしているので、このミドル級チャンピオンの話も、いつもくさいと思い、馬に顔を踏まれてもしたのか、それともお袋さんが幻をみておびえたのか、小さいとき何かにぶつかったのかと思っていたが、とうとう、だれかがスパイダー・ケリーにじかに確かめてくれた。スパイダー・ケリーは、コーンを覚えていたばかりじゃない。いったいどうしているかと、始終氣にかけていたという。

ロバート・コーンの父方は、ニューヨークでもいちばん金持のユダヤ人一族の一つで、母方は、いちばん古い家柄だ。プリンストンへ入るための予備校ではフットボールをやって、ウィングとして大いに活躍し、人種的な差別を受けたことなど一度もなかった。おまえはユダヤ人で、みん

などとは違うんだなどと感じさせられたことは一度もなかった。ところがプリンスストンだ。人づきのいいいへん内気な青年だっただけに、こたえた。拳闘でうさばらしをして卒業の際は、つぶれた鼻とにがい自意識の持ち主で、やさしくしてくれた最初の女の子と結婚するはめになった。この結婚は五年つづき、子供も三人できたが、父親の遺産の五万ドルを使い果たし（残りは、母親のものになった）、金持の細君との不幸な夫婦生活のせいで、おもしろ味のない男の型に固まってしまい、さて別れようと決心したところで、細君のほうが微細画工（ミニアチュア）の男といっしょに家を飛びだしてしまった。何カ月も離婚を考えながら、捨てるのは相手に残酷すぎると別れかねていたところで、細君の家出は、コーンにはたいへんいい薬になった。

離婚が片づくともコーンは、西海岸へやってきた。カリフォルニアで作家連中とつき合うようになり、例の五万ドルも少しは残っていて、まもなく芸術雑誌の後援者になった。この雑誌は、カリフォルニア州のカーメルで発刊、マサチューセッツ州のプロヴィンスタウンで終刊となった。もともと純粹なバトロンので、表紙顧問の一員として雑誌の目次に名がのるだけだったのが、このころには、編集長になっていた。自分の金なのだし、編集長の權威も悪くないことがわかったのだ。雑誌の入費がかさみ、やめねばならなくなったときは、残念な気がした。

もっとも、ほかにも苦勞の種はあった。コーンは、この雑誌で名をあげようと思ったご婦人に牛耳（ぎゅうに）られていた。たいへん強烈な女で、コーンではどのみち脱れようがなかった。その女を愛していると思いこんでもいたのだ。さてこの女性には雑誌がものになりそうにないとわかると、コーンにもうんざりしたが、とにかくできるうちに少しでも利用しなくてはという気になって、ヨーロッパ行きをせがみ、あそこなら、あなたも書ける、とすすめた。で、二人はもとその女が学校を出たヨーロッパにやってきて、これで三年になる。最初の一年は旅行、後の二年はパリで過ごした。コーンには、ブラドックスとよくと、友だちが二人できた。ブラドックスは文学上の友人で、よくはテニス友だちのほうだ。

コーンをつかまえたご婦人の名はフランセス、二年目の終りころには、容貌が衰えかけたことに気がつき、ロバートに対する態度もさほど気のない所有、利用というところから、ぜひとも結婚させるといふ断固たる決意に変わった。このあいだコーンの母親が財産譲渡の手続きをしてくれ、毎月三百ドルほどもらえることになった。この二年半のあいだ、ロバート・コーンは、ほかの女には目もくれなかったと思う。まず幸福といつてよかったが、ヨーロッパ暮らしの連中によくあるように、コーンもアメリカにいたほうがましと考え、それにものを書くということを見つけていた。

彼は長篇を一つ書きあげ、批評家たちのいうほどひどくはなかつたが、まずい小説だった。本をたくさん読み、ブリッジをやり、テニスをやり、郊外のジムで拳闘をやっていた。

ぼくがそのご婦人のコーンに対する態度にはじめて気づいたのは、ある晩三人でいっしょに食事をした後のことだ。

「ラヴィーニユ」で晩飯をすませてから、「カフェ・ド・ベルサイユ」へコーヒーを飲みに入つた。コーヒーの後、フイーヌ(フラン)を何杯か飲み、ぼくはもう帰るといった。コーンはぼくら二人でどこか週末旅行に出かける話をして、いた。パリを離れて、たっぷり歩いてみたいというのだ。ストラスブルヘ飛び、サン・オールドか、アルザスのどこかで歩くのはどうだろう、とぼくはいった。「ストラスブルには知ってる女の子がいて、町も案内してくれるさ」と。

テーブルの下で足を蹴られた。ぼくはもののはずみだろうと思つて、話をつづけた。「その子は、二年間住んでいて、町のことなら何から何まで知っているぜ。すてきな子なんだ」

もう一度足を蹴られて、みると、コーンの女、フランセスが顎をぐつとあげ、硬い顔になっている。

「ちよっ！ ストラスブルなんて、願ひさげだ。ブルージュか、そう、アルデンヌにでも行くか」

コーンは、ほっとした顔になった。ぼくはそれ以上は足も蹴られず、さよならといって、座を立つた。コーンが新聞を買うから、角の所までいっしょにと、ついてきた。「やれやれ、どうしてストラスブルの女の子なんか持ちだすんだ。フランセスの顔、気がつかなかったかい」

「知るもんか。ストラスブルにおれの知り合いのアメリカの女の子がいる。フランセスには、ぜんぜん関係ない話さ」

「いや、だめなんだ。どんな女の子だろうと。禁足ということになつちまうんだよ」

「馬鹿なことを」

「きみは、フランセスを知らんから。女の子は、いっさい禁物。さっきの顔つき、見ただろう」

「ふうん。じゃ、サンリスにでも行こうや」

「気を悪くしないでくれ」

「いや、いいさ。サンリスもいいところだよ。グラン・セーブルに泊まって、森にハイキングに行つて帰つてくれれば」

「うん、そいつはいいや」

「じゃ、明日またコートで」

「さよなら、ジェーク」そういつて、コーンは、カフェに帰りかけた。

「新聞を忘れてるぞ」ぼくはいった。

「そう、そう」角の売店^{ヤオク}までいっしょに歩いた。「怒つて

ないだろうね、ジェーク」彼は新聞を手にもって、振り向いた。

「いや、怒るもんか」

「じゃ、またテニスで」ぼくは、新聞をかかえてカフェへもどってゆくところを見守っていた。コーンに、ちょっと好意を感じた、あの女に痛めつけられているな、と思った。

2

その冬、ロバート・コーンは仕上げた小説をもってアメリカへ行ったが、かなりいい本屋が出版を引き受けた。彼のアメリカ行きで、一騒動もちあがったと噂にきいたが、フランセスがコーンをとりにがしたのは、アメリカのせいだろう。ニューヨークで何人もの女が、コーンに好意を示したので、帰ってきたコーンは、すっかり変わってしまったのだ。以前よりずっとアメリカびいきになり、それほど単純でも、人づき合いのいい男でもなくなった。出版社が彼の小説をかなり賞めあげ、これが頭にきた。それに、何人かの女が進んで好意を示したので、彼にとつていわば周りの世界ががらりと変わってしまった。四年間というものの、コーンの世界は、まったく細君だけに限られていた。三年間、そう三年間近くは、フランセスだけしか目に入らなかった。いったい、コーンはほんとうに恋愛したことなど一

度もなかったのだとぼくは思う。

大学で苦い目を見た反動で結婚し、また細君にとつて自分がすべてではなかったという発見の反動で、フランセスにつかまった。いまでも恋愛を始めたわけではないが、女にもてる素質があることに気づき、自分を好きになって、いっしょに住もうという女がいるというのが、何もすばらしい奇蹟じゃないとわかつてきた。このせいで、コーンは変わり、つき合いくんくなってきた。それに、ニューヨークの親類とブリッジで身分不相応の高い賭け金ではり合った際、うまく運がついて、数百ドルもうけた。これで図に乗ってきて、食うに困れば、ブリッジで暮しが立つなど何度もいつてのけたりした。

それから、こんなこともあった。コーンはW・H・ハドソン（一八四一—一九三二、南米生れのイギリス作家）を読んでいた。といえば、いかにも罪のない話と思われそうだが、コーンのくり返し読んだのが、『深紅の国』だ。『深紅の国』は、大の大人が読むと、たいへん不吉な本になる。熱烈にロマンチックな国にやってきた、完璧な英国紳士のすばらしい空想的な愛の冒険を描いた本で、背景はたいへんよくかいている。三十四にもなった男が、こんな本を人生案内として真に受けるのは、たとえばフランスの修道院育ちの男が、アルジャー（一八三四—一九九、アメリカの少年読み物）の作家、奮闘努力による出世が主題）全集をかかえてウォール街に乗りこむようなものだ。コーンは、『深紅の国』を、

R・G・ダン（アメリカの実業家、一八九三年以来、業界報告をだす）の業界報告なみに、

一字一句真に受けたようだ。そりゃ、コーンだって少しは割引はしたろうが、全体としては、まともな本と受けとった。コーンがのぼせあがるのは、これだけでじゅうぶんだった。彼ののぼせぶりは、ある日ぼくのオフィスへ押しつけてきたときに、ぼくにもはじめてわかった。

「やあ、ロバート、元気づけの応援に寄ってくれたんかい」

「南米へ行きたかないかね、ジェーク」

「いやだね」

「どうして」

「どうしてもないよ。行きたいと思ったこと、ないんだ。金もないし。南米の連中ならパリにもいっぱいいるじゃないか」

「やっこさんたちは、本物じゃないよ」

「本物としか見えんがね、ぼくには」

ぼくは、今週の記事を、臨港線の汽車にまに合わせねばならず、まだ半分しかできていなかった。

「何かゴシップないかな」ぼくはいった。

「ないよ」

「お宅のおえらいご親戚で、離婚でもないかね」

「ないさ、ねえ、ジェーク。ぼくが費用もつとしたら、いっしょに行くかい」

「どうして、ぼくを」

「スペイン語が話せるし、二人いっしょなら、楽しみもふえるから」

「いやだな」ぼくはいった。「パリが好きだし、夏にはスペインに出かけるんだ」

「こういう旅に出かけるのが、念願だったんだ」コーンはそういつて、坐りこんだ。「いま出かけなきゃ、老いこんで行けなくなる」

「馬鹿なこというなよ。きみなんで行きたいところ、どこだって行けるさ。お金はたっぷりあるしき」

「わかつてる。でも、踏ん切りがつかないんだ」

「元氣だせよ。どの国だって、映画で見るみたいなものさ」

が、ぼくも気の毒になった。ぼくの返事がこたえたらしい。

「人生が、どんどん過ぎ去って、自分がほんとうに生きえないと思うと、たまらないんだ」

「人生を生き切っている人間なんていないよ、闘牛士でもなけりゃ」

「闘牛士には興味ないよ。あれは、異常な生活だから。ぼくは、南米の田舎に行きたいんだ。すばらしい旅ができると思うがなあ」

「英領の東アフリカに狩猟旅行は、どうだい」

「いいや、気が進まないな」

「アフリカなら、いっしょに行くよ」

「いいや、興味ないね」

「そいつは、アフリカの本を読んだことないせいだよ。ぴかぴかの美人のプリンセスとの恋愛のふんだんに出てくる本でも読んでごらんよ」

「ぼくが行きたいのは、南米なんだ」

コーンには、ユダヤ人らしい頑固なところがあった。

「階下したにおいて、一杯やろう」

「仕事じゃないのかい」

「いいや」ぼくはいった。階段を下りて一階のカフェに行った。友達を追っ払うには、これがいちばんいい方法だとわかっていた。一杯飲んでから、こういえばいいのだ。

「そう、そう、ちょっともどって電報を打たなくっちゃ」

それで、けりがつく。新聞の仕事では、こうした優雅なる脱け道を見つけるのが、たいへん大事なのだ。いつだって仕事なんかしてないように見えるというのが、ジャーナリストの大事な掟の一つだから。ともかく下のバーに行って、ウイスキー・ソーダを飲んだ。コーンは周りの壁の箱づめの酒瓶を眺めた。「いいとこだな」彼はいった。

「酒がたっぷりあってね」ぼくは相槌を打った。

「ねえ、ジェーク」彼はカウンターにぐっと身をのりだした。「こんな気持ちになること、ないかね、人生がどんどん

過ぎ去ってゆくのに、ちっともうまく使っていないという？ もう人生の半分近くがすぎしまったんだと、はっとしないかい」

「うん、時にはね」

「もう三十五年もすると、ぼくらは死にまうんだぜ」

「おい、いい加減にしろ」ぼくはいった。「ロバート、何いってんだ」

「ぼくは本気でですよ」

「そんなことは、氣にやまんのさ、ぼくは」

「考えるべきですよ」

「氣にやむ種は、他にもいっぱいあるさ。もうよくよはごめんだよ」

「とにかく、南米に行きたいなあ」

「ねえ、ロバート。ほかの国へ行ったからって、どうにもならんよ。ぼくだって経験済みだ。場所が変わったって、自分から脱けだせるもんじゃない。手がないんだよ」

「だって、南米には行ったこと、ないでしょう」

「よせ、よせ。南米へ行こうと、気持はぜんぜん変わりつこないよ。パリはいい町さ。人生をはじめなら、ここで結構じゃないか」

「パリは、もううんざりだ。カルチェ（カルチェ・ラタン、芸術家が集まる）も、うんざりだよ」

「カルチェに、近づかんことだね。ひとりでのしまわって、

何が起こるかを見てごらん」

「なんにも起こりゃしないよ。いつか一晚中ひとり歩きまわったけれど、だめだった。自転車に乗ったお巡りによびとめられて、旅券を見せろといわれただけさ」

「夜のバリって、気持よかつたんじゃない？」

「バリなんて、気にいらんよ」

そういうわけか。気の毒には思ったが、なんとかしてやれるようなことじゃない。というの、すぐに二つの頑固さにぶつかってしまう——南米へ行けば、よくなる、そして、バリはいやだ。一つは本から習い覚えたことだが、あるいは二番目の本からきたのかな。

「じゃあ」ぼくはいった。「二階へ行つて、電報を打たなくちゃならんから」

「どうしても行かなきゃならない？」

「いま、電報はやめれんさ」

「いっしょにいつて、オフィスに坐つてちゃ、悪いかい」

「かまわんよ、きたまえ」

コーンは外側の部屋にいて、新聞をよみ、編集人兼印刷工のぼくは、二時間懸命に仕事をした。カーボン・コピーをそろえ、署名欄にスタンプを押し、大きなマニラ封筒二つに入れ、給仕をよんでサン・ラザール駅にもつて行かせた。それから出て行つてみると、ロバート・コーンは大きな椅子で眠っていた。腕に頭をあてて眠っている。起こす

のはいやだったが、もうオフィスを閉めて、帰リたかつた。ぼくが肩に手をやると、コーンは頭を振った。「とてもできない」そういつて、頭をいよいよ深く両腕の内に埋めた。「とてもできない。どうしたつてだめだ」

「ロバート」ぼくはいつて、肩をゆきぶつた。彼は見あげた。微笑^{ほほえ}んで、まばたきをした。

「いま、何か寝言いつた？」

「何か、ね。でもはつきりしなかつた」

「やれ、やれ、ひでえ夢だつた」

「タイプライターの音で眠くなつたんかい」

「だろうね。昨夜ぜんぜん寝てないんだ」

「どうしたの」

「しゃべつてたんだ」

そのようすが思い浮かんだ。ぼくには、友人のベッドシンを想像する悪い癖がある。アペリチフでも飲んで、ブールヴァール^(大通り)の夜の人ごみを眺めようと、いっしょにカフェ・ナポリタンへ出かけた。

3

暖かい春の夜で、コーンが引きあげた後も「ナポリタン」のテラスのテーブルに残つて、しだいに暮れてゆき電光サインの点^{とも}る様を眺めた。赤青の交通信号、行きかう人

びとの群れ、こみ合うタクシーのわきをぼこぼこ走っている馬車、それに一人で、また連れ立って、夕食にありつこうと歩きまわる娼婦たち。テンプルのわきを通りかかったきれいな子を眼で追っているうち、見失い、また別の子を眺めていると、最初のがもどってくるのが見えた。もう一度通りすぎたところで、視線が合うと、よってきて、腰をおろした。給仕がくる。

「さあ、何を飲む？」

「ペルノー」

「若い子には毒だよ」

「若いのはあんたのほうさ。ギャルソンにいつて、ペルノー一つつて」

「ぼくもペルノーだ」

「どうしたのよ？ パーティにでも行くの」

「そうさ。あんたは」

「どうかな。かも知れないわ、こんな町のことだもの」

「嫌いかい、パリが」

「そーよ」

「じゃ、どこかほかへ行ったら」

「ほかなんてどこにもないわよ」

「つまり、仕合せてわけか」

「仕合せ？ 冗談じゃないわ」

ペルノーというのは、緑がかった、アップサンまがいの酒

だ。水で割ると、白く濁る。甘草かんそうみたいな味で、ご機嫌になれる代り、反動もひどい。いっしよにペルノーを飲んだが、女はおし黙っている。

「さて」ぼくはいった。「晩飯ぐらいは奢わづってくれるかね？」

女はにやりとしかけただけ、どうやら笑顔を見せぬのを旨めづとしてゐるらしい。口を結んでいると、かなりきれいな子ではあった。勘定をすませて、通りへ出た。馬車を呼ぶと、馭者ぎやが車を歩道に寄せてきた。ゆっくりと滑らかに動きだした馬車は、「オペラ座通り」をすすむ。もう店は閉まって、ウインドーだけに灯りの残っている。「通り」は、ただ広々と光って、まるで人気がない。「ニューヨーク・ヘラルド」紙の支局のウインドーには、柱時計がいっぱい並んでいる。

「あんなに時計、いっただいどうするの」

「アメリカ各地の時間を見せてるのさ」

「まさか」

「通り」からはずれて、「ピラミッド通り」に入り、「リヴォリ通り」の雑踏をぬけて、暗い門からチュイルリー公園に入った。女がぐっと身を寄せてきたので、抱いてやる接吻してもらいたそうに、顔をあげる。片手でぼくの顔に触ってきたので、払いのけてしまった。

「よしとくれ」